



JSPS London

NEWSLETTER

No.54
2017.08-2017.10



Carousel at Christmas Market in Leeds

Contents

Japanese Articles

- P02. 巻頭特集 「JSPSロンドン事業説明会の歴史と意義」
- P06. センター長の英国日記⑥ 「日本の大学の研究インフラ-IV: 研究と英語」
- P09. 英国学術調査報告 「イギリス政府による高等教育機関の『教育評価制度(TEF: Teaching Excellence Framework)』試行2年目の結果と課題、次年度実施への展望」
- P14. 在英研究者の者窓から
第13回 ロンドン大学キングスカレッジ地理学科 塩出徳成
- P16. 英国の大学紹介(ヨーク大学)
- P17. 英国の大学紹介(オックスフォード大学)
- P18. ぼりーさんの英国玉手箱 ～英国のクリスマス～
- P19. **新連載** 山田さんの徒然なるままに

English Articles

- P20. Magnonics 2017
- P21. Pre Departure Seminar and Networking Evening
- P23. Events organised/supported by JSPS London
- P24. Voice! from Alumni member
Vol.9 Dr Andrew Pratt
- P26. JSPS Programme Information

巻頭特集

JSPSロンドン事業説明会の歴史と意義

JSPSロンドン・副センター長・糸井 智香

今回は、JSPSロンドンの主要業務のひとつであるJSPS事業説明会について紹介する。JSPSロンドンが長年に渡って実施してきたJSPS事業説明会の経緯や意義について考察してみると、Brexitを前にした英国の高等教育・研究への影響の一面や英国大学の研究資金配分機関との連携をより強化しようとする姿勢が垣間見えてきた。

<事業説明会の成り立ち>

JSPSロンドンの独自事業である「JSPS London Symposium/Seminar Scheme」※で採択されたシンポジウム及びセミナーでは、研究発表の合間に、JSPSの活動及び事業を紹介するプレゼンテーションをプログラムとして必ず入れるようお願いしている。近年では、その認知度は上がり、大学、同窓会員(JSPS Alumni association of the UK and Republic of Ireland)、在英日本人研究者会(JBUK)、研究資金配分機関、在英日本大使館等からの要請によって「JSPS Programme Information Event」等として開催することが多くなった。

記録を遡る限り、最初にロンドンセンターが事業紹介のプレゼンテーションを行ったと思われるのは、2004年に在英日本大使館が主催した「Information Day」であり、その年は同様の要請によってセンター長が3件のプレゼンテーションを行い、JSPSの活動や事業を紹介している。以後、2017年11月までに延べ208回のプレゼンテーションを行ってきた。

右下のグラフは事業説明会の年度ごとの実施件数の推移である。今年度は11月までの集計となるが、既に過去最高を記録している(ちなみに、断らざるを得なかったものは含んでいない)。この開催依頼が増加傾向にある要請の理由のひとつには、Brexitの影響によって、日本への関心が高まっていることがあると考えられる。実際に事業説明会に赴くと、日本との研究における連携強化を望む英国の勢いに圧倒される。

要請の形として最も多いものは、大学からの依頼であるが、同窓会員、JBUK会員が仲介する形での依頼も数多くある。ロンドンセンターとしてInformation Event自体を宣伝・周知したことは多くなく、

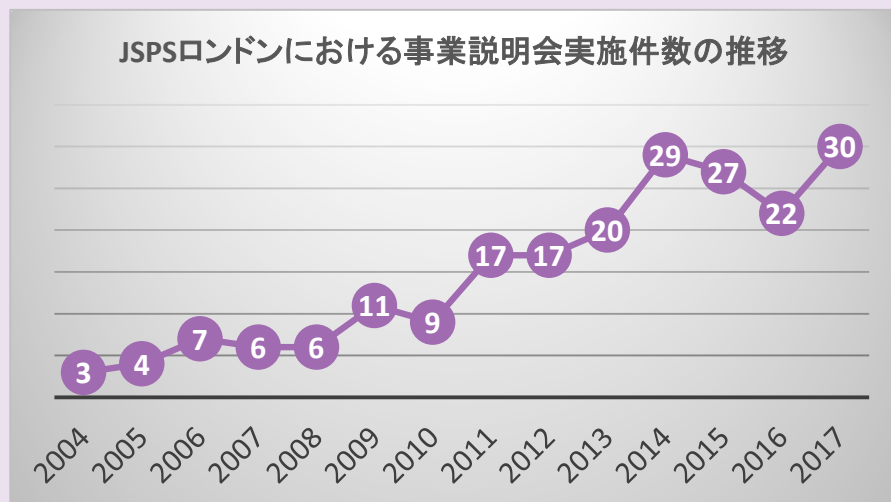
基本的には相手側からの要請に基づいて実施されてきた経緯があり、英国側の日本との連携の需要を表す指標となろう。

<現在の事業説明会の形態>

開始当初はJSPSの全体の活動・事業の説明がメインであったが、次第に英国のニーズを探り、それに答える適切な情報を与えられるよう検討・工夫がこらされていった。現在では、①JSPSの国際事業全体について、英国に焦点を当てた形で説明した後、②若手研究者に特に関心の高いフェローシッププログラムを詳細に紹介、③日本での研究経験のある同窓会員から、日本での研究活動や生活についてのプレゼンテーションを織り交ぜ、④最後に全体を通した質疑応答を行う、という4部構成にて、同窓会員に参加を求めの形が定着してきており、あわせて1時間程度で実施されるものがほとんどである。さらに、参加者や主催者のニーズを確認し、プレゼン内容をその都度変更することはもちろん、説明会後に個人の質問に個別に応じる形式を追加するなど、より参加者に有益な情報を渡せるよう工夫している。

イベントの形態としては、所属する研究者向けに行なわれる小規模なものから、国際シンポジウムやワークショップ、日本

JSPSロンドンにおける事業説明会実施件数の推移



※JSPS London Symposium/ Seminar Schemeについては、本ニュースレターの5ページを参照いただきたい。

JSPSロンドン事業説明会の歴史と意義

を紹介する大規模なイベント(ジャパンフェア)の1プログラムの的なものまで、多種多様である。大規模なイベントやシンポジウムでは、他の交流支援団体と一緒に活動紹介をすることもあり、こうしたイベントには多くの研究者や大学関係者が集まることから、JSPSだけでなく研究者にとっても有益なネットワーキング・情報交換の場になっているという大きな特徴がある。

プログラム終了後には、研究者とのネットワーキングの時間が設けられることが多々あり、また、研究者個人(もしくは小規模なグループ)と個別面談のような形で相談のセッションを設けることもある。大学での開催の場合、大学の経営陣や研究者との意見交換会やキャンパスツアーなどが設定され、熱烈といえるアピールを受ける。キャンパスツアーでは、彼らは「大学の誇り」である部分を必ず見せてくれ、その歴史的な経緯や偉大さについて説明してくれると同時に、現在進行形でどのような改革が行われ、どのような道を大学が進んでいくのか(どの分野に特化し、どのような戦略を持っているのか)というビジョンを、熱をもって語り、どのように日本と連携できるかを真剣に考えている。



上下:事業説明会の様子

国際シンポジウムやワークショップなどで事業説明をする場合は、事業紹介のブースも同時に設置し、そこで個別の相談を受け付ける。研究者個人の分野や経歴(ポスドクなのか、教授なのか等)に応じて、適切なプログラムの紹介を行えることから、とても好評である。

また、ブースの設置は、研究者の生の声を聞きやすく、英国の研究者、在英の日本人研究者が何を求め、何に困っているのかを知ることができ、より研究者の求める支援に近づけることができる。最近のアイルランドでの事業説明会では、同窓会生が少ないために、JSPS London Symposium/ Seminar Schemeに応募したいが難しいという相談を受け、応募資格などの要件緩和を視野に入れ、検討する予定である。



シンポジウム会場に設置したJSPS紹介ブース

<よくある質問>

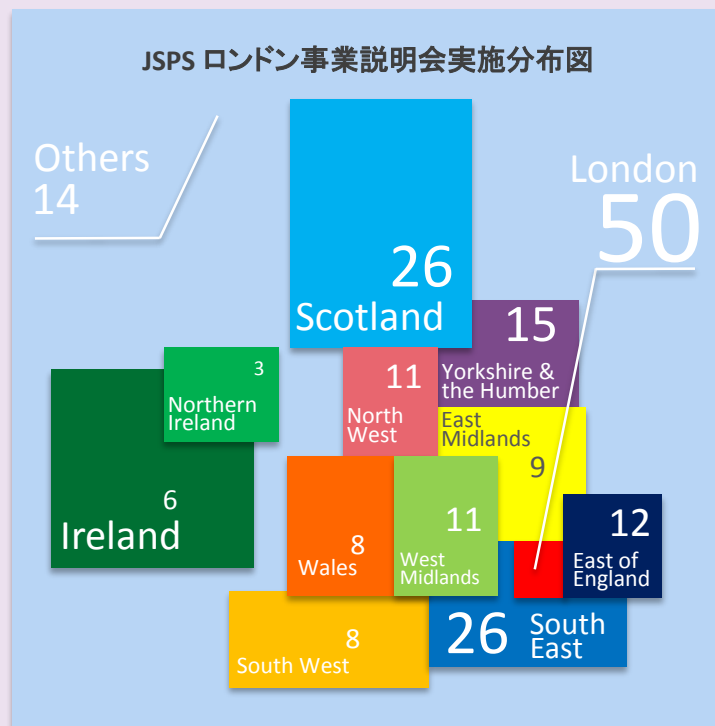
英国の研究者のニーズを知るため、ここで、事業説明会で受ける「よくある質問」を紹介したい。まず、最も多い質問に、JSPSの事業に応募するためには、必ず日本を拠点とする研究者をホスト(共同研究者)としなければならないが、「どのようにホスト(共同研究者)を見つければよいのか」がある。

この質問には、JSPSのフェローズプラザが提供している「JARC-Net」を活用してほしいと提案している。また、国際会議や国際シンポジウム等で出会う日本人スピーカーや参加者と積極的に話をしてみることや、論文などから自分が協同研究をしてみたいと思う日本人研究者が見つけれられる場合には、直接メールで依頼してみるという方法も有効であり、是非行動してほしい、と促している。

JSPSロンドン事業説明会の歴史と意義

JSPSロンドン事業説明会開催数と実施分布図（2004-2017）

国・地方	開催数	実施機関・場所例
London	50	University College London (UCL)、 インペリアルカレッジなど
Scotland	26	エディンバラ大学、 グラスゴー大学など
South East	26	オックスフォード大学、 レディング大学など
Yorkshire & the Humber	15	ヨーク大学、 シェフィールド大学など
East of England	12	イーストアングリア大学、 ケンブリッジ大学など
North West	11	マンチェスター大学、 リバプール大学など
West Midlands	11	バーミンガム大学、 ウォーリック大学など
East Midlands	9	レスター大学、 ノッティンガム大学など
North East	9	ニューカッスル大学、 ダラム大学など
South West	8	ブリストル大学、 パース大学など
Wales	8	カーディフ大学、 スウォンジー大学など
Ireland	6	University College Dublin (UCD)、 ダブリン大学など
Northern Ireland	3	ベルファスト大学、 アルスター大学など
Others	14	オランダ、クロアチア、 ボスニア、ベルギーなど
合計	208	



次に多い質問は、「外国人特別研究員事業のサマープログラムと欧米短期にはなぜ国籍要件があるのか」である。英国の大学は国際化を強く推進しており、学生はもちろん、研究者の国籍も様々であり、国籍による区別や差異はほとんど存在しない。多国籍であることがとても自然なことであるため、すべての人に開かれていないフェローシップに違和感を抱くようである。しかし、これらのプログラムは、欧米の若手研究者にとって、地理的な距離や文化的な違いが大きく、さらにそれによる心理的な負担が過重になろうと想像に難くない日本という国で、長期間の研究生活を送るという決断はそうたやすくできるものではなく、短期間でも滞在することで、日本という国を知り、長期間の協同研究や滞在のきっかけとなつてほしいという思いから作られたものである。事業説明会では、この質問があると、なぜその要件がJSPSにとって必要であるのか、欧米諸国の研究者にはまず短期間で、という配慮が必要だと考えている日本側の事情を説明することができ、ほとんどの場合、理解を得られている。

その一方で、サマープログラムや欧米短期は、より若いうちに、短期間ででの日本での研究経験が得られることから、欧米の研究者のみならず、全ての研究者を目指す人にとって、非常に魅力的なプログラムであるということも言えるであろう。

そのほかには、「日本での研究に日本語は必要か」「家族を連れて行くつもりだが、何かサポートはあるのか」「住む場所はどうすればよいのか」という日本での研究生生活における具体的な不安からくるものや、「すべての学問を同じ土俵で審査できるのか」「プログラムの採択率は」「人文社会科学系と自然科学系の課題における採択割合は」「自然科学系の課題が採択されやすい傾向にあるのか」など、JSPSの審査方法や採択傾向に関する質問が多く見られる。

＜事業説明会の意義＞

印象深かった質問に、「そもそも自分(の分野)がJSPSの事業に応募して良いのか」というものがあった。JSPSロンドンで

JSPSロンドン事業説明会の歴史と意義

長く事務を務めているスタッフによると、資金配分機関としても大きなファンドを持つJSPSは研究者にとって、「ちょっと近寄りやすい存在」であるという。事業説明会に赴くことで、実際に日本との協同研究を模索もしくは計画している研究者と会い、名刺を交換し、話をする。そのことが、研究者との距離を縮め、JSPSを、強いては共同研究の相手としての日本を、身近に感じてもらう絶好の機会となっているのである。また、事業説明会をセッティングしてくれる大学との距離も近くなり、情報交換が容易になる側面もある。

また、逆から見ると、英国の大学は、国内外を問わず、積極的に研究資金配分機関との連携を強化しようとする意識があるということが言える。事業説明会の際に、意見交換会やキャンパスツアーを提案してくる背景には、研究資金配分機関と

のネットワーキングを重視し、自分たちの持つ研究環境や研究者がいかに優れ、魅力的であるかをアピールし、研究者とのマッチングを支援しようという強い姿勢が現れている。英国の大学の、海外のファンド獲得を死活問題と捉える、このような姿勢は、日本の大学が学ぶべきところのひとつであるようにも思える。

日英のコラボレーションを促進するためには、英国の研究者に、日本という国を、そしてJSPSを身近な存在として感じてもらう必要があり、事業説明会によってその垣根が少しでも取り払われるのであれば、これほど良いことはないだろうと思う。我々の活動が、将来の日英の共同研究につながり、強いては日本の研究者のためにもなっていくことを信じている。



Experience Japan Exhibition 2017 での事業説明会



少人数のグループに向けた事業説明会

JSPS London Symposium/ Seminar Scheme とは

JSPSロンドンで提供している在英日本人研究者ネットワーク (Japanese Researchers based in the UK: 通称JBUK) とJSPS国際事業経験者のネットワークであるJSPS UK & Ireland Alumni Associationのメンバーが応募できる公募スキームです。このスキームでは英国、アイルランドでシンポジウムやセミナーを開催するための日本側講演者招へい費用(渡航費)や会場手配費用を支援しています。本スキームの公募情報・詳細は、

JSPSロンドンのホームページをご覧ください。

<http://www.jsp.s.org/funding/2017/09/fy2018-call-for-the-jsp.s-london-symposium-and-seminar-scheme.html>

また、JBUKに登録すると、JSPSロンドンからのイベント、公募情報などをメールで受け取ることができます。JBUKへの登録はこちらから。

<https://ssl.jsp.s.org/members/?page=regist>

JSPS ALUMNI
ASSOCIATION
UK & IRELAND

JBUK
Japanese Researchers
Network based in the UK



事業説明会のお知らせや開催風景を随時facebookで更新しています。

詳しくは下記のサイトからご覧ください。

<https://www.facebook.com/jsp.s.org/>

センター長の英国日記⑥

「日本の大学の研究インフラ-IV:
研究と英語」ロンドン研究連絡センター長
上野 信雄

今年も日本人がノーベル賞を受賞した場合には、本号で巻き起こる議論を紹介したいと思っていたが、今年は‘英国民’になったカズオ・イシグロ氏にノーベル文学賞が贈られた。イシグロ氏は日本人であるが、1984年に英国に帰化しており現国籍は英国である。同氏のノーベル賞受賞の日本での報道は今ひとつ盛り上がり欠けるようであったし、漢字で氏名を書いた報道はすぐに消え、上記のようにカタカナ書きになった。

米国籍である南部陽一郎先生が2008年にノーベル物理学賞を受賞したときは、‘南部陽一郎’で報道されていた。また当時、ノーベル賞受賞者の国籍問題(特に日本の報道に関連して)があれこれ話題になったことを思い出してしまった。マスコミはいったいどのように考えているのだろうか。「日本人」と書いた方が盛り上がり、その記事の載った新聞・雑誌がよく売れ、テレビの視聴率が上昇するからだろうか？ いやいや、他にも理由があるに違いない。

1. 最近の研究を眺める

さて、今年は「日本人」がノーベル賞を受賞せず盛り上がり欠けたので、センター長が誇りに思った最近の二つの研究について言及したい。

一つ目は、昨年の報道から、113番目の元素にニホニウムと名付けることが認められた九州大学の森田浩介先生のグループ[1]の理研での研究成果を上げたい。2015年12月31日、森田グループによる113番元素の発見が、国際機関International Union of Pure and Applied Chemistry (IUPAC)に認定され、同グループに命名権が与えられた。この結果2016年3月18日に同元素の元素名「nihonium (ニホニウム)」と元素記号「Nh」が森田先生らによって提案され、IUPAC内での審査過程を通過し、同年、6月6日22:30に一般の批評/public reviewを受けるためにIUPACのウェブサイトに公開され、その結果を受けて最終的にIUPACにより決定された。

にIUPACにより決定された。

二つ目は、<約77万～12万6千年前>の年代が国際地質科学連合の専門部会によって日本初の地質年代「チバニアン」(千葉時代)と命名される見通しになったという今年の11月13日の報道である。この成果は、茨城大学教授の岡田 誠先生を代表とする茨城大学や国立極地研究所などの研究グループ[2]が地磁気反転の痕跡の詳細な研究によって反転の証拠を示したことによる。機関名の順序は朝日新聞や産経ニュースでは国立極地研究所や茨城大となっていたが、ここではNHK、日経新聞、毎日新聞の記事での順序に従った。どうやら、この方が正確なようだ[2]。

いずれの成果も、確実な客観的証拠に元づいて結論に至る自然科学の方法論に従い、データの信頼性、再現性を確実にしておさえた研究を行った結果が評価されている。加えて、大変興味ある点は、後者の研究において、過去70年にわたる“主に邦文で発表されていたため海外の研究者が読むことができなかった先人の研究成果”をもまとめて英語によるレビュー論文として国際学術誌に発表したことも大きいと思われる[2]。

上記の研究には科学研究に不可欠な証拠を示したという共通点があるが、正反対の研究でもある。即ち、前者は、巨大な設備がないと実施できない研究であり、必然的に経済大国が有利である。一方の地質年代の研究は、チームを見ると分かるように、大変多くの方々の貢献があり、マンパワーを活用した多角的な積み重ねを含めてなし得た研究と考えられる。即ち、アマチュア(あるいはマニアと言えるかもしれない)もその周囲にいて協力したのではないかと推測される。そのような点は、前者では考えられないだろう。日本の研究が多様性に富んでいる良い例であり、同列に評価したい。スーパーカミオカンデのノーベル賞研究は、前者と似ており、どちらかという多額の予算がないと不可能な研究であるが、経済大国の責務と言

える研究でもある。はじめは小さな研究に違いない基礎研究に研究費が行き渡らない問題が指摘されるようになって久しい。つまり、大学が得意であった0から1を目指してみるリスクのある研究が出来なくなり、10を100に進展させる分かりやすい研究に研究予算が流れた結果として、将来ノーベル賞が取れない状況に陥ることが指摘されている。宇宙、素粒子、高エネルギー等の特別な巨大サイエンス分野は別にして、「金力」によって「他よりも早く」世界のデータの収集を行い、ノーベル賞を目指して突っ走らない様にネガティブフィードバックをかける仕掛けも必要かもしれない。配分法の根本的な検討を行うことがそろそろ必要になったと言うことだろう。

2. 英語と研究時間の減少

チバニアンに関わる日本とイタリアの競争に関連して、資質年代の古い研究論文が英語で書かれていなかったため、英語でReview 論文として再発表されたことを紹介した。自然科学分野の論文は、英語で発表するのが当たり前と学生時代にたたき込まれ、覚悟はしていたが英語で論文を「本当に書く」はめになって大変苦労した。

センター長の研究論文は、日本語のものは、日本の学会誌などのための解説か総説と、同様な雑誌から特に依頼された研究論文ぐらいで、日本語の論文はほとんど無いと言って良い。

センター長は1983-1984年(～35才)の頃、ハンブルグにあるドイツ電子シンクロトロン研究所(DESY, HASYLAB)でシンクロトロン放射光を利用した物性研究を行っていた。当時のドイツの大学に留学した者はドイツ語を使用するのが一般的であったが、この研究所は、話をする者の中にたった一人外国人がいると言葉は、躊躇無く英語にスイッチするのである。実験ホールのアナウンスはもちろん英語であった。この頃、同じ研究グループ(と行き来のある他の研究グループ)にディプロマの学生が研究を経験しに来ており(修士クラスだが、卒業研究のような位置付けで研究を経験する)、その中には英語での会話が大変困難な学生が少なからず存在した。実験装置の都合に合わせた生活であったので休日は不定期であったが、休める日曜日には、子供を連れて近所の公園に行くことが多く、近所の子供(女子)が英語で話したいので「つきあってほしい」と頼まれた。自分の英会話もたいしたことは無く同レベルであるので仲良くなって何回か忘れたがつきあうことになった。「ギムナ

ジウムに進学したい」と言っていたので年の頃は小学4年生前後だろう。曰く「I got up at 7 o'clock in this morning, and had my breakfast with my parents. I drank milk and orange juice …」等 といったその日の自分の行動を説明し出すのである。そういう説明をクラスでするのが英語の授業の宿題ということであった。このことは、その当時、ハンブルグのその地域では小学校ですでに英語教育が行われていたことを意味する。紛れもない事実であるが、文部省(文部科学省)の中央教育審議会に関連する会議資料にはこの頃ドイツの小学校で英語教育が導入されていたことは書かれていないので、「試行していた」のであろう(表1参照)。

表1 各国における初等教育段階の英語教育の導入

	国	英語教育の導入時期	開始学年
外国語としての英語教育	日本	2011(平成23)年	第5学年～
	中国	2001(平成13)年	小学校第3学年
	韓国	1997(平成9)年	小学校第3学年
	台湾	2001(平成13)年	小学校第3学年 ※導入当初は第5学年
	ドイツ (ニーダーザクセン州)	2004(平成16)年	小学校第3学年
第二言語としての英語教育	フランス	2005(平成17)年	小学校第1学年 (2008年から)
	シンガポール	1970年代からは基本的に全教科の授業を英語で実施	小学校第1学年～ (全授業を英語で実施)
	インド	1830年代～(英国植民地時代)	全35州・連歩直轄領のうち26州・連邦直轄領で第1学年～9州・連邦直轄領で第3ないし4学年～(この9州でも2～3年以内に第1学年から開始する見込)
	カナダ (ケベック州)	1977(昭和52)年～	第1学年～※州によって就学前教育でも実施

注: 文部科学省、外国語能力の向上に関する検討会(第2回) 配付資料「資料3-1 諸外国における外国語教育実施状況調査結果」の諸外国における外国語教育の実施状況調査結果(概要)から抜粋[3]

日本に帰国後、10年少し後にドイツのディプロマ学生と話したとき大変驚いたのは、多くが以前より遙かに流暢に英語を話すことであった。小学4年生から10年少し後というと、大学生の高学年であり、その時のディプロマ諸君もすでに小学校時代に英語教育を経験していたとすると、大変納得のいくことであった。つまり、10年程度で成果が現れ、その後、ドイツのPhD生やポスドク諸君の流暢に話す英語にはいつも嘖然とするくらい感心した。そういった「英語訓練」を中心とする教育の成果は、10-20年で容易に現れると言うことであろう。同様の効果は、文章を書くことにも現れる。DESY-HASYLAB時代の院

生(研究員も同様)の論文英語ははなはだ怪しかったが、2007年に自分の研究室にきたドイツのPhD院生の書いた共著論文の原稿は、修正するのが大変であった。同時期の日本の博士課程の院生はもとより若手研究者も、英語で書く論文には大変な時間を費やし更に我々教員も彼等の原稿の修正に非常に多くのエネルギーと時間を費やしていた。正直に言うと、日本語で論文が書けたら良いとどれほど思ったかしのれない。しかし、英語で研究発表をすることは「あたりまえ」ということが体の細胞の隅々に行き渡っており、なかなか、英語の負担問題をおおびらに口にすることが出来ない日常になってしまっていた。

そう言う状況の中で、最近の日本人研究者の発表論文数が他国と比べ低下の一途をたどっていることが指摘されるようになり、研究費の減額問題が益々大きな話題となっている。

今年の7月、東京工業大学の細野秀雄教授、在英日本国大使館の松浦博司公使、小川浩司一等書記官と懇談の機会があり、ひよんなことで、日本の英語教育問題が話題にになった。細野先生から研究上の必要性から英語には大変なエネルギーと時間を使っているという問題点についての話が出たこと、そして全く同意見であると言ったことを鮮明に記憶している。細野先生とそのような話題をおおびらに話す前は、研究時間が少なくなる一因に「英語を使うことによる無駄なエネルギー消費と時間消費」もあることを口にすることは前述の理由でタブーのように思っていたが、何とか本気で改善を急ぐ必要がある。表1に示した様に、日本でもすでに小学校からの英語導入が始まっている。ただし、週1コマ/45分であり、他国の授

業時間数に比べると遙かに少ない(詳しくは[3]を参照)。さらに、中国や韓国、台湾などの隣国から10年遅れての開始である。たら、れば、は言うてはいけませんが、センター長がハンブルグで小学生の英会話につきあっていた時代、そして特にその後しばらくの間は日本でも英語の早期導入が活発に議論されたことを記憶している。結果は、日本の文化が壊れる、国語教育が出来なくなる等々、主として、学校の教諭を始め教育委員会(事務局)の方々を始め、日本語で活動する方々の猛反対で立ち消えになったという印象がある。もちろん自分自身の経験から大きくなってから英語を勉強しても習得できるので慌てることはないという意見を述べた方もあったが、ヨーロッパ、アジアの国々を見て自国の文化が消えつつある国はまだ無いように思う。近い将来、英語教育の強化が行われるが、まずはコミュニケーションツールとして会話の訓練が必要と思われる。10-20年で成果が目に見え始め、海外へ若者が行かなくなったことも含め多くの課題が自然と解決されていくのではないだろうか。

今回は、研究所に勤務する日本人研究者の自由度、研究時間についていくつか考えてみる予定であったが、調査に少し時間がかかっているため次回には紹介したい。また、研究費の減少による影響がどのようなことにまで及んでいるか、皆で知る必要がある。たとえば、いわゆる研究論文の掲載雑誌を購読できなくなっている国立大学が以前より増加しているようである。予算が足りなくて出版社や学会と購読の契約が出来ないのである…。調べてみたいと思っている。

参考

[1] 理化学研究所、東京大学、埼玉大学、新潟大学、筑波大学、日本原子力研究開発機構、中国科学院近代物理研究所、中国科学院高能物理研究所、東北大学、東京理科大学、新潟大学機器分析センター、東京大学原子核科学研究センター、大阪大学、東北大学電子光物理学研究センター、山形大学の研究者等が参加: <http://www.riken.jp/pr/topics/2016/20160608_1/>を参照。

[2] 国立極地研究所のホームページの該当部参照<<http://www.nipr.ac.jp/info/notice/20170607.html>>。同ホームページによるとメンバー等の記載は以下の通りである。茨城大学理学部の岡田 誠 教授、国立極地研究所の菅沼悠介准教授、千葉大学の亀尾浩司准教授、国立科学博物館の久保田好美研究員を中心とする22機関32名からなる研究グループ: その他の機関は次の通り; 国立極地研究所、島根大学、有限会社アルプス調査所、神戸大学、復建調査設計株式会社、産業技術総合研究所、海洋研究開発機構、大阪市立大学、東京学芸大学、千葉県立中央博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、九州大学、技研コンサル株式会社、信州大学、文化財調査コンサルタント株式会社。他にも正確な情報が記載されている。

[3] http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2011/01/31/1300649_03.pdf

イギリス政府による高等教育機関の「教育評価制度(TEF: Teaching Excellence Framework)」試行2年目の結果と課題、次年度実施への展望

JSPSロンドン・アドバイザー・生田目 裕美

Point

- TEF2年目の試行結果が2017年6月に発表された。どのような結果が出てどのように社会に受け止められたのか。
- 結果を受けて浮き彫りになった課題とは。
- TEF3に向けた制度設計改善の概要とTEFへの取組みから受ける日本への示唆を考える。

Introduction

Teaching Excellence Framework (TEF) は、大学等各高等教育機関の教育の実績を明確に示すために2015年に英国政府により導入が決定された評価制度であり、各機関における「教育の質」、「学習環境」、「学習の成果」について分析が行われるものである。2016年に試行第1回目が、2017年6月に試行第2回目の結果が発表された。2019年までは試行期間とされ、毎年試行に改善を加えていくことで評価制度を整えていくことになっている。

英国においては高等教育機関の評価、ランキングが盛んに行われているが、世界的に有名なTimes Higher Education (THE) 社による「THE 世界大学ランキング」やQuacquarelli Symonds (QS) 社による「QS 世界大学ランキング」などは高等教育に関連する民間企業により行われているものであり、これらに比べると英国政府主導で行われているTEFの結果は、英国内においてより高い注目を集めていることは間違いが無い。

2回目の試行を終え、その評価結果は英国内に大きなインパクトを与えた。と同時に多くの課題も指摘された。試行3年目に向け、英国政府はどのようにTEFの改善に取り組んでいくのかを紹介すると共に、TEFへの取組み姿勢が日本の高等教育に示唆する点について考えてみたい。

1. TEFの概要と過去の経緯

再度、ごく簡単にTEFの概要について整理しておく。(TEF2の制度設計、枠組みの概要についてはJSPS London Newsletter Vol. 50の「英国学術調査報告」⁽¹⁾も参照されたい。)

a. 実施主体:

イングランド高等教育財政会議

(HEFCE: Higher Education Funding Council for England)⁽²⁾

b. 実施目的:

実施の理由として政府は以下の4点を挙げている。⁽³⁾

- ・高等教育機関への進学を目指す学生に選択指標を提示する。
- ・大学における教育の重要性についての意識を向上させる。
- ・優秀な教育を評価し社会的に認知する。
- ・雇用者、ビジネス界、産業界、専門家、それぞれのニーズに見合った情報を提供する。

c. 評価委員会メンバー:

学者、専門家、学生など27名で構成され、2017 TEF2評価委員会議長は、シェフィールドハラム大学長のProf. Chris Husbandsである。

d. 評価対象:

TEF2調査には295機関が参加した。

なお、試行期間中は各機関の参加は任意とされている。

e. 評価手法:

3つのマトリックスのデータを分析した統計的な結果を元に、更に各機関の男女比、年齢層、マイノリティや障害者への配慮、専攻等の指標を標準化した上で、最終調整は各機関から提出された15ページの補足説明資料を参考に評価委員が行う。(次頁表1参照)

評価基準、評価結果については、それぞれ次頁表2、表3をご覧ください。

ここで、実施に至る背景を少し具体的に説明する。

英国の高等教育機関は世界最高水準の「研究」の質の高さを求め、高い授業料を支払っている学生に対する「教育」がおろそかになっているのではないかと指摘が、授業料の高騰と共に指摘されるようになった。

そこで政府は、質の高い学位プログラムを提供する大学の情報を取りまとめることで、大学等高等教育機関への進学を目指す学生に対し、よりの確で具体的な進路選択の参考になる指標を提示すると共に、TEFで評価することで、大学側に対しては教育の質を絶えず上げていくインセンティブを促すことを目指したのである。

また、政局を巻き込んだ議論になったため見通しが不透

明になりTEF3の実施目的には明記されなくなってしまったが、TEFの評価結果に応じて大学の授業料を値上げすることができシステムにもなっている。イングランドの大学の授業料は政府によって設定可能な上限額が2017学年度現在では£9,250(約139万円⁽⁴⁾)とされており、現時点では全ての大学がこの上限額を設定している。学費は毎年のインフレ率に応じて上昇させることが可能となっているが、高額な授業料は学生や親にとって非常に負担が重い。値上げを認めるためのエビデンスとしてTEFを活用し、評価結果が良かった大学は授業料を上げてよい、十分でなければ上昇率を半分に、若しくは据え置き、としたのである。

■表1 評価手法における3つのマトリックスと評価指標及び具体的評価方法

	評価指標	評価方法
Matrix1 教育の質	<ul style="list-style-type: none"> 学生の授業への満足度 学生へのフィードバックが十分になされているか アカデミックなサポートが十分になされているか 学生満足度調査(NSS: National Student Survey)のデータを活用	各マトリックスごとに、「+」、「=」及び「-」のフラグを立てる。
Matrix2 学習環境	<ul style="list-style-type: none"> 学習資源の効果的な活用状況 学術研究、実務訓練が十分に提供されているか 中途退学率 高等教育統計局(HESA: Higher Education Statistics Agency)データを活用	「+」基準に比べてぬきんでいる 「++」更にぬきんでいる 「=」基準と同程度である 「-」基準に比べて劣っている 「--」更に劣っている
Matrix3 学習の成果	<ul style="list-style-type: none"> 卒業後の進路、就職率 卒業後の学習歴 HESAの高等教育卒業生の動向調査(DLHE: the Destinations of Leavers from Higher Education survey)データを活用	

■表2 評価基準

金	「+」を合計二つ以上取得し、「-」が全く無い
銀	「+」も「-」も0~1つのみ取得、若しくは「+」を2つ以上取得したが、同時に「-」もついた
銅	「-」が合計2つ以上ついた

■表3 評価結果

評定	取得機関数	評定の定義
金	59	英国の高等教育部門において最も質の高い教育が一貫して提供されている。
銀	116	英国の高等教育に期待されるレベルを超える質の高い教育が継続的に提供されている。
銅	59	十分な質の教育が提供されている。
その他 条件付	61	データ不十分で評価を受けず

2. TEF2の結果を受けて

TEF2の結果は今までに実施されてきているワールドランキングとは様相が違っていた。大学ランキングヒエラルキーの上層部にいる伝統的な大学が全体的に優位であったが、有名大学の一部が「銅」にランク付けされ、他方でいつもはあまり上位に食い込まない大学が「金」にランク付けされたりしたことで、大きなインパクトを与えた。

結果詳細についてはイングランド高等教育財政会議(HEFCE)のウェブサイト参照いただきたい。

<http://www.hefce.ac.uk/tefoutcomes/#/>

(1) 特徴的な点

インパクトを与えた顕著な例として、社会的に評価の高い大学のいくつか、「銅」の評価に甘んじたことが挙げられる。Times Higher Educationの世界ランキング2017で世界5位であったThe London School of Economics(LSE)、英国の名門大学で構成されるラッセルグループ⁽⁵⁾の一角を占めるUniversity of Liverpool、University of London(UCL)を構成するSOAS(the School of Oriental Studies)やGoldsmith、医学系で評価の高い同じくUCLのSt. George等が「銅」と評価された。

他方で、1992年の高等教育改革の際にポリテクニクから大学に昇格した、比較的新しい大学であるBangor University, University of Derby, Coventry University, University of Portsmouthなどが金の評価を受け、一躍脚光を浴びることとなった。これら大学のホームページでは、誇らしげにTEFで「金」の評価を得たことを掲載している。

(2) 各界の反応

今回の試行結果を受け、各界は様々な反応を示した。印象的であるのが、高等教育政策研究所(HEPI: Higher Education Policy Institute)のNick Hillman理事長のコメントである。⁽⁶⁾

「TEFはその目的を果たしている。もしTEFが今までの他の大学ランキングの結果を複製したような結果しか出さなかったのであれば、その意味を成さなかったであろう。TEFは他のランキングと異なる結果が出るように設計されており、今まで脚光を浴びることの無かった優秀な機関を見出し、また改善が必要な部分に目を向けさせることを目的に作られたものだからである。」

上記のような肯定的な意見がある一方で、また当然ながら想定外に低いランクを付けられた大学からは一斉に反発があった。いずれもラッセル・グループに属し、「銀」と評価された

Durham University, University of York、「銅」と評価されたUniversity of Liverpool, University of Southamptonは、TEF発表の5日後に結果を不服とする抗議を行った。これらの大学は、学生満足度調査やコースの修了率、卒業生の雇用などのデータの分析手法に欠陥があること、また15ページに及ぶ補足説明資料の評価基準が審査員によって違ったのではないかと強くアピールした。

(3) TEF2の結果から見えてきた今後の課題

大学側のアピールは最終的にはTEF評価委員会側には受け入れられずに結果は確定することとなったが、調査指標として用いられたデータの使用については多方面から疑義が呈せられた。

具体的には、学生のアンケート調査結果であったり、落第率であったり就職率であったりと、「直接的に教育の質とリンクするものではない」データが指標に使用された点が大きな問題点として指摘されている。人為的な恣意が働かずに公平で透明な評価を行おうとすると、何らかのデータを分析する方法が一番説明がしやすいが、「教育の質」という、データによる分析が一番難しい分野の評価を行おうとするこの限界を、まさに指摘されたことになる。

学生満足度調査(NSS)は、アンケートに回答する学生がどれ程真剣に回答を記載したか、という懸念も指摘されている。例えば、全ての質問項目をまとも読むこと無く、全て同じレートにチェックをして提出している学生が少なからずいる、といったことが具体的な事例として挙げられている。

また、TEFの評価結果が授業料の値上げにリンクすることとなったため、授業料の値上げに反対する学生組合(Student Union)が調査への参加ボイコットを学生に呼びかけ、例年より回答率が悪くなるという事象も起きた。全体で見ると前年に比べ回答率が72%から68%へと減少した。University of Oxford、University of Cambridge、University of Manchester、University of Sheffieldなど12の大学はボイコット運動により回答率が50%以下であったため結果に含まれなかった。この大規模なボイコット運動は今後のTEFの構成に大きな影響を及ぼすことになる。

更には、TEFの結果がどのようなデータを基に導き出され、結果が何を意味するのか、という事について、情報の受け手の重要な一角を占める英国への留学希望学生が十分に理解していないという懸念も示された。教育関連企業Hobsonsが今後英

国に留学を考えている学生に対しTEFについての意識調査を実施したところ、調査に回答した学生のうち55.3%はTEFの結果は教育省からの視察官による大学の講義の抜き打ち検査による結果だと思っていること、「銅」とされた大学は教育の質が「十分ではないと評価された」と間違った理解をしていることが明らかになった。⁽⁷⁾ TEFは国内の学生だけではなく海外の留学希望者が大学を選択する際の重要な役割を果たすことになる。TEFの結果は何を意味しているのか、どのように活用すれば効果的な進路選択につながるのかを広く周知理解してもらうための取り組みが求められることが指摘された。

3. TEF3実施に向けて

教育省では来年のTEF3実施に向けた取り組みを始めている。TEF3における変更・改善点の概要が2017年9月に教育省より発表された。⁽⁸⁾ 概要は以下の通りである。

a. 学科単位の評価の実施

TEF2では機関としての評価が実施されたが、学科によって教授の質が変わり、評価も変わってくることは議論を待たない。TEF3は更に学科レベルにまでブレイクダウンして評価を実施することがアナウンスされた。

b. 評価指標マトリックス1で使用された学生満足度調査結果(NSS)の配分比率の変更

学生満足度調査結果(NSS)の評価への反映率を昨年比半分(50%)にする。また、学生のボイコット運動により回答率が50%に至らず調査結果として成り立たなかったデータについても、過去3年のデータまで遡って評価を行うなど何らかの対策を講じることとする。

政府は「ボイコット運動はTEFの結果になんら影響を及ぼすものではない」と明言しているものの、学生満足度調査の配分比率を今までの半分にしたのは、ボイコット運動によりTEFの結果に影響が出るのを最小限にするための方策であることは間違いないだろう。

c. 社会人学生への教育に関する評価の配慮

社会人学生が在籍学生の35%以上を占める機関については、社会人学生に対する教育面の配慮や卒業後の就職、若しくは更なる勉学の継続に関するサポート状況について、追加で補足説明資料を提出することを可能とすることとした。

d. 就職状況評価に使用するデータの追加

卒業後6ヵ月後の進路について調査したDLHE(Destinations

of Leavers from Higher Education)データに加えて、卒業1年、3年、5年後の収入について調査したLEOデータ(Longitudinal Educational Outcomes)⁽⁹⁾も活用することとした。

TEF3に参加を表明している機関数は2017年9月現在で299機関となっている。次回の評価は学科レベルでの実施になるため、まずは参加を表明した機関の中から30~40機関をピックアップして実施される。また格付けの評価は行わないこととしている。

更に興味深い変更がなされていた。調査に用いられたマトリックスが「教育の質」の根本を図るものではないののではないかと、という批判を受けている、ということについて前述したが、名称がより実態に即した“Teaching Excellence and Student Outcomes Framework (TEF)”-教育の質と学生の学習成果の評価制度-に変更されたのだ。名称変更にあたっては特に明確なアナウンスがあったわけではなく、10月に公表されたTEF3の実施要領のタイトルが表記のように変わっていただけである。特段の説明がなされていないことが非常にイギリス的で興味深い。ベースにあるのは「現在のTEFは試行段階のものであり、改善を加えながら精度の高いものを作り上げていく」という考え方であり、まずは変更(改善)ありき、なのである。調査の顔ともいえるタイトルであっても変えることを躊躇しないし、いちいちの説明も不要、という大胆かつ合理的な考え方である。国民・大学を巻き込んでオープンな形で調査を作り上げていくことを厭わない手法は、「何事にも不完全性はつきものである」ということを十分に理解し受け入れる度量が受け手側にあるからこそ初めて成立するものであろう。

TEFの評価に応じて学費の値上げを可能にすると決定されたものの、今般の英国総選挙でメイ首相が来学次年度の授業料値上げの凍結を発表するなど、TEFの運用方法も時の政治に左右され試行錯誤が続いている。2019年までの試行期間でどのようにこの評価手法がまとまっていくのか、ある一定の落ち着きどころを見出すことができるのか、今後の推移は興味深い。

Conclusion

国が主体的に大学をある意味ランク付けするような取り組みは、日本では特に大学が国立であった時代にはタブーであった。国立大学法人になってからも、大学の評価は国が行うのではなく、第三者機関が行うことが望ましいという考え方がベースにあり、イギリス的な大学の評価手法を取り入れることは現時点では困難であろう。

他方で日本でも大いに参考にすべき考え方を挙げておきたい。大学・科学担当大臣Jo Johnson氏は大学関係者を前にしたスピーチでしばしば、高い学費を払いサービスを受ける側(消費者)である学生や納税者に対する必要十分な「説明の義務」をサービス提供者側である大学に求めている。はっきりと「大学は学生に対しより明確なContract(契約)を提示するよう」に

と述べているのである。この考え方がTEF実施の根底にあるわけであるが、「大学がサービスを提供する」、「学費に見合った顧客サービスを大学は提供しているか」という視点は日本の大学も常に意識しながら運営することが求められる。“students at the heart of the system”2011年の英国高等教育白書において掲げられたタイトルである。

(1) JSPS London Newsletter Vol. 50
http://www.jspso.org/newsletter/JSPSNL_50L.pdf#page=11

(2) 1992年の継続・高等教育法により設置された公的機関。主な役割は以下の4点である。

- ・各大学に補助金を配分。
- ・補助金配分の案分率を決定する根拠となるデータの収集・分析。
- ・高等教育の質の保証に係る規制・監視。
- ・政府の高等教育政策の実施及び普及。

(3) 教育省(Department of Education)作成のTEF実施要領より
https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/651155/Teaching_Excellence_and_Student_Outcomes_Framework_Specification.pdf

(4) £1=150円で計算(2017年10月現在)

(5) 代表的な英国の研究型大学24校で組織される大学連合体。1994年に結成され、政府・議会や他の公的機関への働きかけを通じて世界レベルの研究と教育を先導していくための諸条件を整備することをミッションとしている。ラッセル・グループを構成する24の大学は英国の総大学数の15%に過ぎないが、英国の大学への研究補助金のうち76%が加盟大学に配分されている。グループの名称は、ロンドンのラッセル・スクエアに面したホテルラッセルで初めて会合が開かれたことに由来する。

(6) BBCのインタビュー記事より引用
<http://www.bbc.co.uk/news/education-40356423>

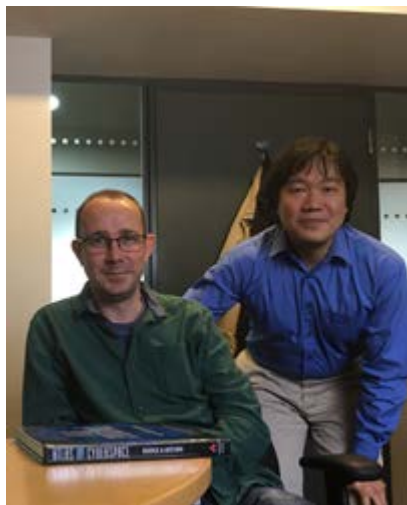
(7) Hobsons調査結果詳細
<http://www.qs-enrolmentsolutions.com/blog-tef-ratings-or-university-rankings-new-Hobsons-research.html>

(8) TEF3に向けた教育省レビュー
<https://www.gov.uk/government/publications/teaching-excellence-framework-lessons-learned>

(9) LEOデータ:3つの省the Department for Education with employment, the Department for Work and Pensions, and Her Majesty's Revenue and Customsの持つデータを総合してまとめたもの。

在英研究者の者窓から

第13回 ロンドン大学キングスカレッジ地理学科 塩出徳成



地元ロンドンのジャーナリスト・作家の Matthew Brown氏と筆者の研究室にて（筆者、右）

今回は、都市解析・計量地理を研究されているロンドン大学キングスカレッジの塩出徳成先生に日本、イギリス、アメリカにわたる研究生活や、その重要な節目における恩師や研究者の方々との出会いや交流について綴っていただきました。国によって異なる研究環境の小故事やこれから世界を目指す若手研究者へのエールを込めて。さて、今号は「在英研究者の者窓」からどんな景色が見えてくるのでしょうか。

私の研究は、都市解析・計量地理と呼ばれるもので、店舗の最適立地や交通網の分析など、都市空間における様々な事象の時空間的な発生や広がり、他事象への影響を計量的に解釈しています。最近では、犯罪や交通事故の分布、疫病の伝搬経路などを正確に分析するための手法の開発に力を入れています。

この分野は、日本国内に優れた研究者が多く、私自身も、よい先生方と研究環境に恵まれたため、当初は留学を考えていませんでした。それが博士課程でロンドンに来ることになったのは、当時の指導教官で、ご自身も留学及び海外で教鞭を取られた経験のある岡部篤行先生が、国際的に活躍したかったら外の環境でもまれた方がよいと背中を押してくれたことがあります。その頃、ちょうど巡り合った専門書で、*Fractal Cities*という、都市の構造や成長の度合いを非整数次元を用いて分析する変わった本がありました。この著者のMike Batty先生だったら師事したいと思ってメールを出したところ、ニューヨーク州立大学が

Dr Narushige Shiode

Reader in Geocomputation & Spatial Analysis

Department of Geography, King's College London

- 1995 東京大学 工学部 都市工学科 卒業
- 1997 東京大学 工学系研究科 都市工学専攻修士課程 修了
- 2005 Ph.D., Centre for Advanced Spatial Analysis, University College London, University of London
- 2000-2003 Research Fellow, Centre for Advanced Spatial Analysis, University College London
- 2003-2009 Assistant Professor, Department of Geography, The State University of New York at Buffalo
- 2009-2014 Lecturer in Spatial Analysis & GIS, School of Planning and Geography, Cardiff University
- 2014-2015 Associate Professor in Urban Science, Centre for Interdisciplinary Methodologies, University of Warwick
- 2015- 現職

- 2003 アラブ首長国連邦の都市計画シンポジウムにて、都市のフラクタル次元の解析に関する研究で Sheikh Dr Sultan Bin Mohamed Al Qassimi International Prize を受賞。
- 2015 日英米におけるGIS教育への貢献のため シンフォニカ統計GIS活動奨励賞を受賞。
- 2016 JSPS London JBUK Japan Awardを受賞。

らユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)に転職するところだが、ロンドンでよければ来なさいというお返事をいただき、そこからトントン拍子に話が進みました。経団連・石坂財団から奨学金を受けて、UCLに留学したのが1997年4月、それから実に20年間、海外に住み続けるとは当時は思いもよりませんでした。

Batty先生は気さくで人情味がある方で、プライベートでは大変お世話になりましたが、研究面では、よく言えば一人前扱い？で、指導教官というより、2~3か月に一回、共同研究の打ち合わせをする先輩のような感じでした。また、留学当初は知らなかったのですが、その後、CBEを授与されたり、地理学分野のノーベル賞と称されることもある Lauréat Prix International de Géographie Vautrin Ludを受賞するなど、非常に高名な先生だということがだんだん分かってきました。そのせいか、イギリス人を中心に常時10人前後の博士課程の学生が在籍していて、先生の指導を受けるといって、オープンスペースのオフィスで学生同士で議論している中でいろいろな研究のアイデアが生ま

れてきました。当時は、インターネット、とくにウェブがようやく普及してきた頃で、その利用実態や、実空間との関連の研究は進んでおらず、なにか書けば第一人者になれるという時代でした。そのため、興味の赴くままにあれこれ調べては同期の学生仲間と学会で発表し、ジャーナルへ投稿するということを繰り返しているうちにいつの間にか3年が経ってしまいました。肝心の博士論文は一向に進んでおらず、奨学金も切れたので、Batty先生に相談すると、じゃあ一緒にファンドを取ろうとあっさり言われ、運よく3年のグラントがとれたため、就労ビザに切り替えて、UCLにとどまることになりました。

2003年になって、たまたまBatty先生が以前教えていたニューヨーク州立大学バッファロー校の地理学科で助教授として採用されたこともあり、また妻が博士号を取得して動きやすくなったこともあって、その後、6年間はナイアガラ瀑布近くで積雪の多い田舎町でのんびり過ごしました。アメリカでは、国公立大であっても給料が自由交渉できる(黙っていると、殆ど変わらないが、他校でオファーを取り付けてくると、大幅に上げてくれる)こと、学生が自分はテストでもっとできたはずだと言って交渉に来ること、同僚を採用する際、選考に残った候補者は、それぞれ2~3日ずつ滞在させて、学科中の教員が個別面談をしたり、模擬授業をさせたりと、入念に面接することなど、色々新鮮な驚きがありました。

バッファローは、当時、全米における地理情報解析センター(NGIA)の三拠点の一つとして関連研究が盛んで、活躍している同僚も多く、研究環境としては申し分ありませんでしたが、2008年秋に妻がケンブリッジでポストドクを始めたため、イギリスで職場を探したところ、奇しくも、やはり以前Batty先生が教えていたカーディフ大学の都市計画で空きがみつき、2009年春から再びイギリス生活が始まりました。しかもBatty先生の別宅がカーディフ郊外にあったため、落ち着くまで自由に使っていたといわれ、さらに小さな村で公共交通がないことから、そこに置いてあるスペアカーも貸してもらいました(先生のご家族以外で先生の車の保険に入ったのは私だけでした)。

教員としてはカーディフ大学が私にとって初めてのイギリスの職場になったのですが、会議が多いことや、学生のレポートを採点する際の手続きが煩雑であること、特に公平性の観点から名前を伏せ、同僚がセカンドマーキングした上でexternal examinerなる人物が登場してコメントしてくるなど、アメリカに比べて事務手続きにより多くの時間を割くようになりました。

また、同僚との輪講形式の講義も多く、共同で教材を作っていく場面が増えました。カーディフにいた5年間は、家族のいるケンブリッジとの間の片道200マイルの道のりを、週に1~2回、専ら深夜に車で往復していましたが、幸い、2014年になってワーリック大学に転職できたため、ケンブリッジから片道90マイルの車通勤で済むようになりました。さらにその一年後にロンドン大学キングスカレッジに移って電車で通勤できるようになり、移動がより一層楽になりました。

現在、キングスカレッジでは、時空間分析のための様々な新手法を開発し、従来よりも正確かつロバストな結果が出るように研究しています。また、ロンドンの立地を活かして、メトロポリタン警察と共同で犯罪のホットスポットを抽出して軽減につなげる研究や、ロンドン交通局やロンドン内の自治体と共同で自転車交通事故の分布、高齢者の分布、低所得者の分布などを調べて、それぞれの計画策定に役立てるといった、実社会へ目に見える形で還元できる研究活動ができるようになり、毎日が非常に充実しています。恩師のBatty先生は今もUCLで研究所を構えていて、時折、立ち寄っては薫陶を受けています。また、Batty先生門下の同窓生たちは、世界中に散っていますが、昔、パブをはしごして回った悪友達とは今もジャーナル論文の査読依頼などのやりとりを日常的に交わしています。

また、JSPS Londonから助成を受けて、昨年、日本に出張し、複数の大学・研究機関を訪問、現在、大都市圏における放火・不審火や、日本の地方都市の過疎・高齢化などのテーマを中心に日本の先生方と共同で研究を進めています。この分野は、やはり日本の研究者が様々な成果を挙げているので、ぜひイギリスやアメリカでも発表してもらい、あるいは海外の職場で活躍する同僚の方が増えればと願っています。

最後になりますが、私のこれまでの研究者人生は、素晴らしい師匠、そして研究者仲間との出会いによって形作られてきました。職場も住居も度々変わりましたが、幸い、その都度、周りの人に助けられてきました。特に学部・修士時代の恩師の岡部篤行先生、博士課程以来ずっとお世話になっているMike Batty先生、そして妻の塩出志乃(Birkbeck, University of London)の三人には、常に支えられ、世話になりっぱなしでここまで来ました。皆様の研究生活も佳き師匠や仲間との出会いを通して、充実したものになることを願っています。

| 英国の大学紹介

ヨーク大学(University of York) ～一丸となって未来をみつめる～

ヨークは、ロンドンから北へ列車で2時間ほど移動したところに位置する。日本でもおなじみの犬種ヨークシャテリアは、ヨークを中心とするヨークシャー地方でネズミ捕りのために生まれた。大きな2本の川が合流する平地に軍事要塞を建設したのが、都市のはじまりだと言われており、現在も12世紀頃に築かれた城壁が街を囲むように残っている。

ヨーク大学は、1963年に230名の学生とともに誕生した。英国研究型大学グループであるラッセルグループに所属しており、理学部、人文学部、社会科学部の3学部で構成されている。キャンパスは大きな湖を囲うように位置しており、所々にかかる小さな橋を渡って学生やスタッフは行き来する。2016年のThe Complete University Guideでは、イングランドとウェールズにおいて最も安全な大学に選ばれており、多くの学生やスタッフはこの自然豊かで安全な環境を大変気に入っているようだ。その証拠に、彼らが大学を紹介する際、必ずと言っていいほど湖の美しさと大学の安全性に触れている。

現在ヨーク大学は、他大学と同様に大学の研究強化と国際化を進めているが、その取り組みは大学の一体感を増しているように感じる。例えば、大学院生の新入生オリエンテーションで行われた“Research Excellence”の説明会においてもその雰囲気は垣間見られた。まずResearch Excellence Training Team(RETT)から、研究者としての才能、技術、キャリアを伸ばすために、どのようなプログラムがどの段階で準備されているかが分かりやすく説明され、続いてResearch Student Administration(RSA)、図書館、情報部門担当者から、研究生活のためにどのような事務的サポートが受けられるかが補足される。その後、学生会や卒業生から学生生活について語られるとともに、3MT(Three Minute Thesis)コンペティション※受賞者によるプレゼンテーションが行われた。15分の休憩を挟んで計2時間で行われた説明会は、各部署や学生が横断的に協力をはかりながら、より具体的に魅力的な学生生活をイメージできる構成となっていたように思う。研究強化の取り組みには様々あると思われるが、若手を育てようとする大学の雰囲気が良く伝わり、この中から将来のResearch Championが出てくるのではないかと感じた。

また、ヨーク大学にはCentre for Global Programmeというチームがあり、彼らは16年以上に渡りサマースクールやショートコースの提供を行っている。サマースクールは、人文学、法学、歴史学等々、大学の依頼に応じてコース内容をアレンジしており、講義だけでなく、ディスカッション、プレゼンテーション、インタビュー等から構成されている。興味深いことに、ヨーク大学には大学職員向けのプログラムがあり、学生だけではなく大学職員も多く受け入れている。このプログラムでは参加者の職歴をかんがみながら関係部署とのインタビューを組み込んでいく。これらのプログラムからも、彼らの連携の良さが見られるとともに、サマーコースを通じてヨーク大学職員の国際化もはかろうとしている点に工夫を感じられた。

今回、内部の打ち合わせにオブザーバーとして参加する機会を得たが、そこでは大学の戦略を如何に現場に落とし込むかについて議論が行われていた。大学の戦略を「絵に描いた餅」「Pie in the sky」に終わらせないための議論を丁寧に行うことが、彼らの一体感を生む秘訣かもしれない。

(国際協力員 林田 志保)



Heslington Hall, University of York

大学基本情報	
キャンパス数	1
学生数(留学生率)	学部生11,710名/院生3,205名(10.2%)
大学ランキング (上2段:世界/下2段英国)	Times Higher Education 2018: 137位 QS World University Rankings 2018: 135位 The Complete University Guide: 20位 The Times and Sunday Times Rankings: 17位
Alumni (JSPS同窓会員)	8名
JBUK (在英日本人研究者)	5名

※3MTコンペティション: 3分間で自身の研究をプレゼンテーションする競技会で、2008年にオーストラリアのクイーンランド大学で生まれた。現在は世界で200以上の大学が実施しており、PhD学生が参加することができる。聞き手が一般市民であるため、専門用語を用いずに分かりやすく伝える能力が求められ、3MTへの参加を通じて研究者としてのコミュニケーション能力向上が期待されている。

| 英国の大学紹介

オックスフォード大学(University of Oxford) ～Collegeが紡ぐ歴史と絆～

オックスフォードといえば、英語圏最古の創立でケンブリッジと並ぶ名門大学、誰もがその名を聞いたことがあるだろう。「大学の中に町がある」とまで言われるオックスフォードの風景は、自ずと重厚な歴史を思い起こさせる。オックスフォード大学はCollege制を取り入れている大学としてまた有名である。Collegeとは、訳せば「学寮」となるのだろうが、なかなか日本ではなじみのないシステムなので、分かりにくいと思う方も多だろう。今回は、そのCollege制を中心に、オックスフォード大学の知られざる一面を詳らかにしてみたい。

しいて言えば、ハリー・ポッターに登場するグリフィンドールやスリザリンのような学生が所属する寮に近い。オックスフォード大学には44の独立したCollegeが存在し、学生はそのうちどこかのCollegeに所属することになる。オックスフォード大学への入学が許可された後、Collegeの入寮についても許可されないと正式にオックスフォード学生となれない※ので、これまた厳しいのである。Collegeは学部を単位にした組織ではなく、同じCollegeに自然科学を専攻する学生がいれば、人文学の学生もいる。ただ、Collegeとしてより力を入れている研究分野がある場合は、その分野の研究者や学生が多く集まる傾向にある。スポーツ競技、チェス、弁論などの大会がCollege対抗で盛んに行われており、勉学だけでなく様々な活動への積極的取組みが推奨されている。このようにCollegeには独自の文化と歴史があり、そこで寝食を共にするフェロー(教員)や先輩・後輩とは大変絆が強くなるという。

大学全体の研究支援部門を束ねるResearch Services部長のDr Glenn Swaffordのお話によれば、オックスフォードのCollegeには5つの必要要素があり、この5つなしにしてはCollegeは語れないという。①Church、②Cloister、③Quad、④Hall、⑤Library ①の教会については、大学自体が古くから宗教的な研究がその後の学術活動に結びついていることから、教会がCollegeに不可欠なものであることは容易に想像がつくだろう。②は建物の中心をなす回廊である。③はその回廊に囲まれた中庭、④はCollegeに所属するものが一緒に食事を取り、一同に会する際に使用する大ホール、そして⑤はCollegeが長い歴史の中で蓄積してきた独自の文献を収める図書館である。学生・教員に関わらず、それぞれが帰属する大切な「場所」として、長い年月

※ 一部学位取得を目指さない大学院生コースは除く。

を経て守られてきたものばかりである。

さて、ここでそれぞれ特色のあるCollegeを紹介してみたい。
Merton College: 創立は1264年とも言われ、オックスフォードでもっとも古いCollegeの一つである。オックスフォード大学のCollege対抗学部生学カランキングであるNorrinton Tableではいつも上位にランクインしている。卒業生にTS Eliot、JRR Tolkien、Andrew Wilesなどの有名人を連ねる。

Christ Church College: The Houseとも呼ばれる、オックスフォード大学でもっとも有名なCollegeと言える。規模も最大で、600名以上の学生を抱えている。1546年創立以来、13名の英国首相を輩出している点も特筆に価するだろう。

St Cross College: 創立は1965年。第二次世界大戦後、増大する大学院生の受け入れのために建てられたCollegeで大学院生のみが所属している。学生の60%が海外からの留学生であり、国際色豊かなCollegeでもある。新しいCollegeらしく、モダンなデザインの施設も建築中である。

興味の尽きないCollege制、Collegeの歴史はオックスフォードの歴史そのものと言っても過言ではないかもしれない。オックスフォードに行く機会がある方は、数百年の歴史を踏みしめながらCollegeめぐりをしてみたいはいかがだろうか。

(国際協力員 松村 彩子)



St Cross Collegeの伝統的なCloister(回廊)とQuad(中庭)(左図) 新しく建築中の学生居住スペース(右図)

大学基本情報

College数	44
学生数(留学生率)	学部生11,425名/院生7,620名(16.8%)
大学ランキング (上2段:世界/下2段英国)	Times Higher Education 2018: 1位 QS World University Rankings 2018: 6位 The Complete University Guide: 2位 The Times and Sunday Times Rankings: 2位
Alumni (JSPS同窓会員)	33名
JBUK(在英日本人研究者)	43名

ぱりーさんの英国玉手箱

クリスマス
クラッカー



Q 英国のクリスマス

英国のクリスマスってどんな感じでしょうか？
楽しく過ごすコツなどありますか？



A ではクリスマスについて簡単にお話をしましょう。準備が大切なんです。コツはとにかく準備すること！

クリスマスプレゼント

ハムやチーズなどの食べ物、ワインやチョコレート、ポインセチアなど観葉植物、他にクリスマスバージョンの商品などが一般的なプレゼントです。中でも英国らしい贈り物として、「ギフトハンパー」といってバスケットにハム、チーズ、ケーキ、シャンパンやチョコレートなどを詰め合わせたものがあります。いつから準備するかというと、1年前からしているという用意周到な人もいますが、最近英国でも浸透してきているのがブラックフライデー。11月第4週の金曜日のセールです。電化製品などプレゼントにしたい場合はこの日を待って買っています。さて、プレゼントといえばラッピングは欠かせません。いつも自分でラッピングをしていると、日本で見た美しく包装された贈り物のことを思い出します。それはまさに洗練された技であり、本当に素晴らしいと思います。それから、忘れてはいけないのがカードです。最近ではe-cardが普及していますが、やはり大切な人には紙のカードを出した方が気持ちが伝わるのでは。私は、今年はいは The Royal Society for the Protection of Birds (RSPB) という自然保護の慈善団体が出しているクリスマスカードを使用する予定です。どちらにしても、クリスマスカードはクリスマス前に届くように準備をしてくださいね。

クリスマスのデコレーション

デコレーションは通常12月1日から飾り始め1月1日に取外しますが、24日に飾り付けをし、1月5日のEpiphany(公現祭:クリスマスから12日目)に片付ける、「クリスマスの12日間ルール」に従う場合もあります。私は毎年デコレーションのオブジェを購入しており、天使やクリスマスツリー、ガーランドを使って楽しみながら飾り付けをします。最近では家の前や窓をイルミネーションで飾る人も増えてきていますね。

イブ、クリスマス、ボクシングデー

クリスマス期間の料理は大変です。私は昨年、10人分の料理を作りました。骨付きのビーフ(イブ用)、七面鳥とガチョウ(クリスマス用)、ギャモン(塩漬けた豚の後肢肉のハム、26日ボクシングデー用)を事前に用意して料理に取り掛かりました。これだけの素材を一度に調理しないといけないのでオー

ブンもダブルオープン(通常のオープンの上部もしくは横に補助的なオープンがついているもの)でないと間に合いませんね。これらの料理は伝統的なもので母から教えてもらったレシピで作っています。そろそろクリスマスプディングの作り方も教えてもらわないといけないなと思っています。これはクリスマスケーキのことで、ドライフルーツやナッツ類をブランディーに浸して作ります。蒸して1ヶ月ほど熟成させないといけないので11月初旬から作り始めるんです。この熟成期間が重要なですよ。そしてクリスマスディナーに欠かせないのがクリスマスクラッカー。隣に座った人とクラッカーを引っ張りあい、火薬が入っているのでパンという音を立てて中身が出てきます。その中身は小さいおもちゃ、格言、クイズ、小話、紙でできた王冠(ディナーの間皆さん被っています)。私のパーティーではその中にそっと宝くじを忍ばせています。Good Ideaだと思いませんか。

クリスマス当日は交通機関の鉄道、バスなどすべて止まります。イブの夜から翌日まで過ごす場合などそのことを頭に入れて用意周到に計画を立ててください。

12月26日ボクシングデーというのはあまり日本では馴染みがないようですが、昔大英帝国だった頃裕福な階級がクリスマスでもらったたくさんプレゼントを貧民層に分け与えたというところから来ているのです。まさしくクリスマスの真髄です。現在はクリスマスセールの開始日となっているので、伝統的なものより商業的になってきましたね。それから、パントマイム(パント)が英国ではクリスマスの風物詩の一つです。パントとは歌あり踊りありのどたばた喜劇のことで、舞台と観客の掛け合いがあるのが特徴ですね。定番の演目は白雪姫やジャックと豆の木、英国民話で有名な「ディックウィットントン」などで、家族で楽しめるものが多いです。人気のパントはチケットが売り切れる場合があるので早めに計画してください。

クリスマスの期間には日頃会えない家族と過ごし、その年の出来事をそれぞれ話し合うときです。家族とゆっくり食事とお酒を楽しみ、日ごろの疲れを癒すため、1年の中でも特に大切な時期だと考えられています。そんな平和な日を過ごすために、この期間に向けてまさに preparation, preparation, preparation!

現地職員の視点で、英国の今を語る新しい連載記事がスタートします。記念すべき第1回は知っているようで知らない英国を構成する4つの国に迫ります。

山田さんの徒然なるままに

～ JSPS London 現地職員が贈る、知られざる英国を様々な視点から語る痛快エッセイ ～



英国は4つの国から成っている。 イギリス=United Kingdom、でもなんだか・・・。

イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つの国からなるのがイギリス(The UK: United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)である。だか、日本人にとって、イギリスが4つの国から成ることはあまり実感がわかないものである。そこで、日頃より疑問に思うところをあげてみた。

1) 冬季夏季オリンピック、パラリンピック、世界陸上など

1つの国と考えると原因のひとつがこれである。イギリスチーム=Team GBと頭に入ってしまったがGB (Great Britain)には北アイルランドが含まれていない。なぜ？もちろん北アイルランドを含めてTeam UKに替えろ！という意見は北アイルランドの政治家だけでなく、世間でも思っているもの。しかし、英国オリンピック協会の見解ではTeam GBはUKだけでなくマン島、チャンネル諸島とか、領土フォークランド、ジブラルタルも含んでいるとして、なぜかTeam UKの名称を拒絶している。なので1999年以来呼ばれているこのTeam GBに定着してしまったようである。

2) サッカーW杯の予選 / UEFA 欧州選手権などの予選

オリンピックの流れからサッカーW杯でイングランドの出場はイングランド=イギリス、と考えると。しかし現在2018年開催予定ロシアW杯の予選が行なわれているが、それぞれの活躍が報道されるとやっぱり4カ国なんだと思う。でもなぜイギリスだけが4つに分かれて出場するのだろうか。応援するファンとしては、頭でわかっていても気持ちが納得いかない。W杯で優勝するにはUKとして出場した方がその確率が高くなるのでは？といやみを言いたくなる。でもぜひ一度チャリティーイベントでこのドリームチームを実現してもらいたい。

3) 大学学費

スコットランドの大学は地元/EUの学生であれば基本的には無料。だが、イングランド、ウェールズ、北アイルランドからの学生からは高額な学費を徴収する。なぜEUを優先して同じUKの学生を冷遇するのだろうか？又ウェールズや北アイルランドの大学でも地元学生には学費が優遇されている。残念なことにイ

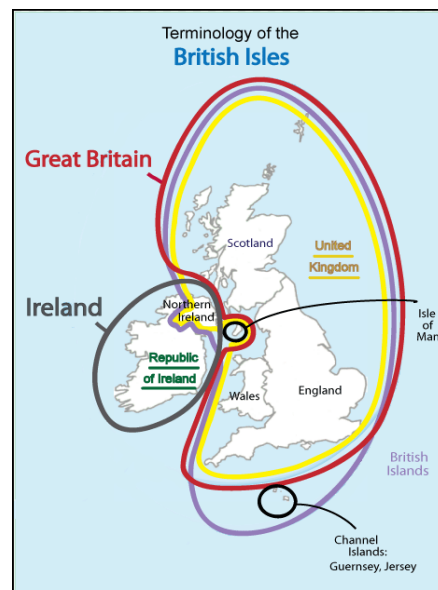
ングランドでは特に地元学生優遇がない。つまり国内どこに行っても高い学費を払うことになる。国それぞれの方針ということなのであろう。

4) 北アイルランドとアイルランドの関係

ちなみに、北アイルランドのサッカーやオリンピック選手は北アイルランドだけでなくアイルランドの代表になることができる。例えばリオオリンピックでは全29人の北アイルランド出身の選手がいたが、なんとその内21人がTeam Ireland として出場したとか。ラグビー代表チームでは、北アイルランドチームがなく、北アイルランド選手はアイルランドチームに入る。これはアイルランドが分裂する前からのアイルランドラグビー協会が存在したからである。北アイルランドとアイルランドの関係は近いようで遠く、大変複雑なもの。

北アイルランドの分権政府が不成立状態、スコットランドの独立問題等でスタージョン首相はうるさいし、普段でも4つの

国をまとめないといけないのに、さらにBrexitも控えているので、保守党内での騒音もあるし、メイ首相の心中を察します。あまり頑固にならないでくださいね。フィリップさん、ぜひ支えてやってください。



出展: Wikipedia
https://en.wikipedia.org/wiki/Ireland%E2%80%93United_Kingdom_relations

| Recent Activities

JSPS London Symposium Scheme

Magnonics 2017

Magdalen College, University of Oxford, 7-10 August 2017

This biennial international conference takes place in the UK for the first time and marked the record high participants. One of the organisers and a JSPS JBUK member, Dr Hidekazu Kurebayashi, University College London gives us a report about it. The conference saw all levels of researchers from early career to senior across the world attended, and lots of future exciting collaborations are expected to come out of them.

You can find waves in everywhere around you – kids enjoy waves on a beach; when you throw a stone in a pond, you can create ripples as a wave. We can do a similar throwing-a-stone-into-a-pond experiment with magnets. In this case, water (in the pond) is a magnetic material and a stone is a magnetic field. When we tap one area of the magnetic material with the magnetic field, you can create magnetic waves (magnons) and they start to propagate. Magnonics 2017 is a conference for scientists who believe that we can build the next generation of computing devices using these magnetic waves.

Magnonics stands for “magnon + electronics”. It builds on our knowledge of magnetism and electronics, and now further looks for the quantum nature of magnons. The main objective of Magnonics 2017 was to bring together world-leading scientists in the relevant research areas, with a specific aim of discussing technical and fundamental aspects of using magnons as a building block of new information technologies. This Magnonics conference is a symbolic one for the field and Magnonics 2017 is the fifth in a series of events, the first to be held in the UK.

Magnonics 2017 overall was a great success, attracting more than 130 participants from 20 different countries who work in a spectrum of the loosely-defined research field of Magnonics.



Delegates pictured on the third day of the meeting.

This number of participants is a record high in the history of Magnonics conferences and testimony to the growing interest in the field and the quality of the meeting’s scientific program. This conference offered a place where scientists of all career levels could spend days and nights together and encouraged stimulated, concentrated discussions. UK and Japanese scientists were at the centre of such research activities, and during the conference week there was a strong presence of Japanese and UK scientists in many different ways. To name a few, Invited talks from Professor Saitoh, Tohoku University, (who gave the IEEE Distinguished Lecture), Professor Ono, Kyoto University, Drs Satoh (Kyushu University) and Hashimoto (Tohoku University) were all well-received, followed by many interesting discussions during the sessions as well as outside. Younger researchers such as postdocs and PhD students from Japan attracted large crowds in front of their posters. These were nicely embedded in the conference programme where we had 13 different scientific sessions totalling 44 (23 invited) speakers with 60 poster presentations, together with other network sessions carried out by a Nature-journal editor and JSPS delegates.

This very successful scientific event could not have happened without all the hard work by the organising team and by generous supports from our sponsors. A special thanks goes to Dr Alexy Karenowska from University of Oxford who served as co-Chair of this event. JSPS financial supports were vital to maintain the high quality of the event, particularly for inviting the high-profile Japanese speakers, as well as by the JSPS event which attracted a number of early-career researchers for JSPS fellowship opportunities. Nowadays, finding conference organising funding is a tricky one – the majority of research councils decided to terminate their supports for this kind. The JSPS conference scheme was among an only few that we could have applied and we are very fortunate to be selected for funding.



A conference gala dinner was held in the historic fifteenth century Hall of Magdalen College Oxford.

| Recent Activities

Pre information event for JSPS fellows

Pre Departure Seminar and Networking Evening

The Magic Circle, 19 October 2017

JSPS London organised the second Pre Departure Seminar and Networking Evening in FY2017. The semi-annual event was held at The Magic Circle this time. The seminar features a Japanese language class and useful information sessions for newly awarded JSPS Fellows. After the seminar, we had Networking Evening, where more Alumni and JBUK members joined. An award ceremony for the members granted in BRIDGE Fellowship or JSPS London original funding schemes.



Networking Evening participants at The Magic Circle

On 19th October 2017 a seminar combining a Japanese class for beginners and information about preparations for a research trip to Japan was organised by JSPS London and held at the Magic Circle Headquarters. Participants included recent awardees of several types of JSPS Fellowships. The seminar started a Japanese language class for beginner's level. The teachers were Mr Makoto Netsu, Chief Japanese language Advisor and Ms Kanako Ukai, Assistant Japanese Language Advisor both from The Japan Foundation London. This lesson covered words and phrases for practical everyday situations both for living and working in Japan including self-introductions in order that fellows are able to simply explain about their research area. Basic language to be able to shop, order food and make travel arrangements while in Japan was also taught as well as an introduction to reading hiragana and katakana.

After a short break, the next segment of the seminar began and included formal presentations on pre departure preparations from JSPS staff and Alumni. This session started with welcoming remarks from the Director of JSPS London, Professor Nobuo Ueno and was followed by a short self-introduction from each participant. The purpose of these self-introductions was for fellows to link similar areas of research and institutions being visited overall. In this group our fellows will be visiting a varied array of departments at top universities and research institutions all over Japan, from the Mathematical and Physical Ethnology Laboratory at Hokkaido University in the north to the Faculty of Philosophy at Hiroshima University in the south, with a cluster of researchers also visiting national institutes that are located in the Tsukuba Science City. The rest of the seminar was presided over by Ms.

Polly Watson, International Programme Coordinator of JSPS London, who at first explained the purpose of the event and about the different presentations that were to follow. The first presentation was from Ms Chika Itoi, Deputy Director of JSPS London, who gave essential advice about preparing for a research trip to Japan and the kinds of assistance available from JSPS. Ms Ai Ozaki, from the Bilateral Cooperation Division at JSPS Tokyo, next gave a presentation on the JSPS programmes and Alumni Association activities to consider to build future collaborations with Japan. After a break, JSPS Alumna, Ms Pola Berent, from University College London, who had recently returned from Japan on JSPS Short Term Pre/Postdoctoral Fellowship, gave a presentation about her experiences as a JSPS Fellow. She gave a lot of thoughtful advice on aspects to living and working in Japan including considerations for accommodation, using currency, mobile phone and WiFi access, research and general culture and challenges she faced and how she overcame them.

JSPS London was also pleased to have in attendance guest speakers Mr Jason James, Director General of The Daiwa Anglo-Japanese Foundation and Mr Rory Steele, Programmes Executive from the Great Britain Sasakawa Foundation. Both gave presentations on the activities of their organisations to make seminar participants aware about further funding opportunities they offer to do research in Japan. After the pre-departure seminar, the UK & RoI JSPS Alumni Association held a networking evening to include Japanese researchers based in the UK as well, that allowed for networking among members and new JSPS fellows in a relaxed atmosphere. The evening started with a presentation from a member of the UK & RoI JSPS Alumni Association Executive Committee, Dr John

| Recent Activities

Brazier, based at the University of Reading, to explain about the recent and future activities of the Association, including recent awards made under the BRIDGE Fellowship and Symposium Scheme as sources of funding available exclusively to Alumni Association members. This presentation was followed by an award ceremony for Alumni and JBUK members granted in FY2017 either a BRIDGE Fellowship for Alumni to revisit Japan or the JBUK Japan Award for Japanese Researchers based in the UK that supports short research trips to Japan or finally the Symposium and Seminar Scheme award that supports a UK-Japan academic event at institutional level. During the ceremony, each awardee was invited to comment on their achievements made using one of these sources of funding and received a congratulatory certificate and gift. In FY2017, 5 BRIDGE Fellowships, 2 JBUK Japan Awards and 5 Symposium Scheme awards were made. This ceremony was followed by a group photo, drinks reception and buffet to allow for networking and the chance for further information exchange between new fellows and

Alumni in preparation for their trips to Japan. Attendees could also enjoy sake generously donated by one JSPS Alumnus, Dr Ed Neal, from the new Craft Sake Brewery in the UK called Kanpai London and also a tour of The Magic Circle Museum containing artefacts that have been used by world famous magicians.



JSPS Alumna, Ms Pola Berent, from University College London gave a lot of useful tips to the new JSPS Fellows.

Comments from attendees:

"The event was extremely useful, in a whole host of ways, from gaining a smattering of Japanese to learning more about funding opportunities. The event was well-organised and really increased my enthusiasm for visiting Japan for the first time."

Dr Peter Kail (University of Oxford), JSPS Short Term Invitation Research Fellow

"What an excellent seminar and reception. It was very nice to meet the team at JSPS, and put faces to names of people who had been so helpful and clear via email. The lesson covered basics of Japanese greetings, and reached the point of describing our specific areas of research. The teachers were extremely enthusiastic, funny, and enjoyable to listen to. The talks themselves gave a good overview of the process of getting to Japan, and contemplating living there. Overall, a meeting that functioned to substantiate the process, and kick start preparations for leaving London!"

Mr Michael Shannon (King's College London), JSPS Short Term Pre/Postdoctoral Research Fellow

"I really enjoyed the Pre-departure meeting. It was held in a lovely venue and all the information received was very useful. I particularly liked the talk from the former JSPS fellow which included plenty of tips and some daily problems she faced that I had not thought about yet, but definitely I will. Finally, it is a must to add that the sushi served after, during the reception, was delicious!"

Ms Keiko Yakabi Diosdado (Cardiff University), JSPS Short Term Pre/Postdoctoral Research Fellow

● Events organised/supported by JSPS London
from August to October 2017 ●

7-10th August 2017

Magnonics 2017

at University of Oxford, supported by JSPS

(JSPS gave a talk on JSPS Overview and programmes at the event.)

5th September 2017

JSPS Programme Information Event at University of Reading

14th September 2017

JSPS Programme Information Event at Japan Information Day, University of York

25th September 2017

JSPS Programme Information Event at University of Manchester

27-28th September 2017

Tokyo Tech-Imperial Workshop: Bioscience and its links with Technology - Synthetic biology, data science, and neurotechnology at Imperial College London, supported by JSPS

(JSPS gave a talk on JSPS Overview at the event.)

4th October 2017

JSPS Programme Information Event at UCD Japan Fair, University College Dublin

5th October 2017

JSPS Programme Information Event at Goldsmiths, University of London

19th October 2017

JSPS London Pre Departure Seminar and Networking Evening at The Magic Circle

● Future events organised/supported
by JSPS London ●

◆ **Symposiums & Seminars**

23rd January 2018

AMS-JSPS Joint Event on Medical Imaging and AI applications at Embassy of Japan in the UK

14th February 2018

JSPS London Symposium & Seminar Scheme at University College London (TBC)

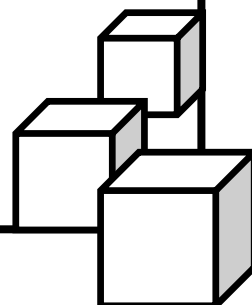
22nd February 2018

Joint Symposium with the EPSRC (TBC)

◆ **JSPS Programme Information Event**

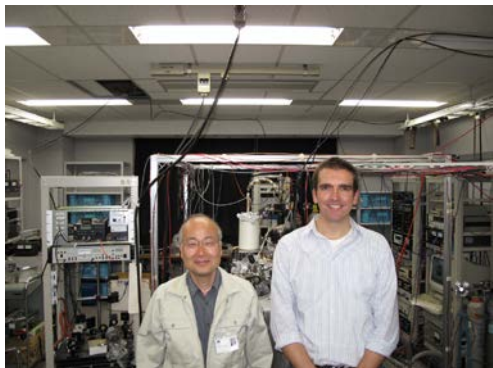
6th December 2017 at University of the West of England

January 2018 at Nottingham Trent University (TBC)



Voice! from Alumni member

Vol.9 Dr Andrew Pratt



In the lab at NIMS with my host JSPS researcher, Dr Yasushi Yamauchi.

Dr Andrew Pratt had his fellowship at National Institute for Materials Science in Tsukuba. He tells us about his enjoyable life in Japan and Japanese research environment as well. The relationship he developed in Japan led to his current collaborations with Japanese researchers. His story is full of tips for the future fellows who would like to make the most of fellowship in Japan personally and professionally.

I had heard of the opportunities available for foreigners to perform research in Japan under various JSPS programs from colleagues whilst studying for my PhD several years ago. With this in mind, along with a desire to internationalise my CV, I applied to the Standard program to work for one year in the group of Dr Yasushi Yamauchi at the National Institute for Materials Science (NIMS) in Tsukuba. Both the group of Dr Yamauchi and my own specialise in studying the electronic, chemical, and magnetic properties of surfaces and interfaces that are relevant to materials that show promise in the development of next-generation technologies. Prior to applying to the program, Dr Yamauchi and I had never previously collaborated although after sending an email to introduce myself and outline my intentions for the research project, he kindly agreed to act as host-researcher. His experience in hosting other JSPS Fellows and good command of English greatly helped with the application process.

I was intending to take a crash course in Japanese before the start of my contract but could not arrange appropriate tuition in

Dr Andrew Pratt

Lecturer in Condensed Matter Physics
Department of Physics
University of York

Biography

1997-2001	MPhys Physics, Department of Physics and Astronomy, University of Sheffield
2001-2005	Ph.D. Physics, Department of Physics, University of York
2005-2009	Postdoctoral Research Assistant, Department of Physics, University of York
2009-2013	Senior Research Fellow, Department of Physics, University of York
2009-2010	JSPS Postdoctoral Fellow (Standard), National Institute for Materials Science (NIMS), Tsukuba, Ibaraki
2013-2014	International Centre for Young Scientists (ICYS) Fellow, National Institute for Materials Science (NIMS), Tsukuba, Ibaraki
2014-	Lecturer, Department of Physics, University of York

time. However, after arriving in Japan I found onward travel to Tsukuba and my accommodation fairly straightforward with no major problems. That is not to say I didn't experience a culture shock after stepping off the plane, by no means a bad thing and completely expected. It's a sensory overload of unfamiliar sights, sounds, and tastes although, for me at least, it did not take long to embrace this new and high-quality way of life.

Tsukuba is a Science City around an hour away from Tokyo via the extremely convenient Tsukuba Express. Only around 50 years old, the city was constructed to house many scientific institutions and as such has a much higher density of foreign researchers than elsewhere in Japan, many of whom stay at Ninomiya House from where an excellent view of Fuji-san can be seen on a clear day. Possibly due to its youth, some people find Tsukuba a little sterile at times and lacking the traditional culture seen elsewhere in Japan although with Tokyo so close, I didn't feel I missed anything in this regard. In fact, I really enjoyed living in the city, in large part due to the many friends made from all across the globe.

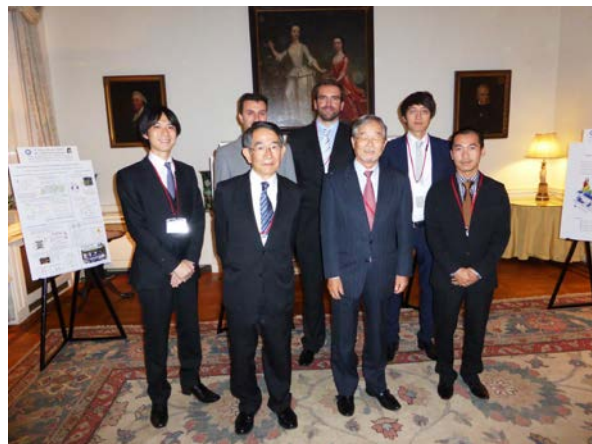
The scientific facilities at the National Institute for Materials Science are exceptional and I found my time there extremely productive. So much so, that after the expiration of my planned one-year stay, I applied (successfully) to JSPS to extend my contract for a further three months. This enabled me to complete a study on the growth of organic semiconductors on ferromagnetic substrates, an investigation that was not in my original research plan. Fortunately, the other members of my group could all speak good English preventing any language barrier in the lab. Also, despite the sometimes negative reports of the Japanese work ethic, I found the research environment to be relaxed and enjoyable, whilst at the same time stimulating.

The large budget associated with the Fellowship enabled me to present the research output from the project at two conferences in Japan and at two in the USA, whilst the stipend easily supports a good lifestyle of travelling and eating out. The holiday allowance on the JSPS program is also very generous and allowed me to return to the U.K. twice and to explore Japan when family visited. For advice on where to go and what to see, well-known guidebooks are pretty comprehensive although take in recommendations from other foreign researchers and Japanese friends and colleagues. My advice for prospective Fellows is to begin travelling and exploring the country as soon as possible after arriving. I was a little complacent in my first few months thinking that I had plenty of time to 'get in all in' but of course the list of things to do only grows and grows as your knowledge of the country increases.

Japan's reputation of being highly efficient and organised is fitting and I found various procedural tasks, such as obtaining a re-entry permit (necessary for leaving and returning to Japan multiple times), a Japanese driving licence (no test needed for U.K. citizens), and an alien registration card surprisingly simple, even with the language barrier. With so many foreign researchers based in Tsukuba, a large support network exists and so whenever problems did arise they could be quickly solved. There are many chances to enrol in Japanese language classes which are run at beginner and intermediate level at many research institutes in Tsukuba and also at Ninomiya House. I took both classes over the first six months of my stay and found a basic knowledge of Japanese genuinely helpful in everyday life. Away from the research environment, understanding of English is minimal.

I found my fifteen months as a JSPS Fellow to be immensely

rewarding, both personally and professionally. Following the end of my fellowship, I returned to NIMS as a Guest Researcher on three separate occasions and spent a further year there on a tenure-track position at the International Centre for Young Scientists. Had I not secured a permanent academic position back in the U.K. in 2014, I imagine that I would still be living and working in Japan. Due to the long-term relationships I have developed there, I will certainly be returning regularly and am currently involved in a large JSPS Core-to-Core grant that links my university with Tohoku University and NIMS. Establishing links to institutions and researchers in Japan has been extremely beneficial to my career and to couple this with the chance to experience the unique culture the country has to offer highlights the value of a JSPS Fellowship.



Dr Pratt (centre back) at the British Embassy in Tokyo at an event for young scientists in Japan.



At the beautiful Kegon falls in Nikko.

JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations Application Schedule

Fellowship Programmes

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Recruitment	Dec-17	Jan-18	Feb-18	Mar-18	Apr-18	May-18	Jun-18	Jul-18	Aug-18	Sep-18	Oct-18	Nov-18	Later
Summer Programme		British Council TYO			15th						Core period: 12 Jun- 22 Aug					
Pre/ Postdoctoral Short Term (1-12m)	Pre/Postdocs	JSPS TYO	1st Call	Closed (The next application period will be in early Oct 2018.)												
			2nd Call	4th-11th										Jul 2018- Mar 2019		
			3rd Call				2nd- 6th							Oct 2018- Mar 2019		
			4th Call							4th -8th					Jan- Mar 2019	
		JSPS LON	1st Call	1st						May 2018- Mar 2019						
			2nd Call						TBA				Nov 2018- Mar 2019 (TBA)			
Postdoctoral Standard (12-24m)	Postdocs	JSPS TYO	1st Call	Closed (The next application period will be at the end of Aug 2018.)												
			2nd Call					23th- 27th				Sep-Nov 2018				
		Royal Society British Academy				TBA						Sep- Nov 2018 (TBA)				
			6th					Apr- Nov 2018								
Pathway to University Positions in Japan	Postdocs	JSPS TYO		Suspended (Under review)												
Invitational: Long Term(2-10m)	Mid Career to Prof level			Closed (The next application period will be at the end of Aug 2018.)												
Invitational: Short term (14-60d)	Prof, Associate Prof	JSPS TYO	1st Call	Closed (The next application period will be at the end of Aug 2018.)												
			2nd Call					23th- 27th					Oct 2018- Mar 2019			
Invitational: Short Term S (7-30d)	Nobel Prize Level	JSPS TYO	1st Call	Closed (The next application period will be at the end of Aug 2018.)												
			2nd Call					23th- 27th					Oct 2018- Mar 2019			
BRIDGE Fellowship	for Alumn Members	JSPS LON			TBA						Jul 2018- Mar 2019 (TBA)					
JBUK Japan Award	for JBUK Members	JSPS LON				TBA				Jun 2018- Feb 2019 (TBA)						

Application period or deadline Fellowship starting time Fellowship period

International Collaborations *The Following schedule is for the researchers on the Japanese side.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Duration	Dec-17	Jan-18	Feb-18	Mar-18	Apr-18	May-18	Jun-18	Jul-18	Aug-18	Sep-18	Oct-18	Nov-18	Later
JSPS London Symposium & Seminar	for Alumni & JBUK members	JSPS LON	Symposium: 1-3 days Seminar: 1 day	Closed (The next call will be announced around Sep 2018.)												
Bilateral Programme	Research Groups	JSPS TYO	Joint Research: Max 2 yrs										TBA			Apr 2019 (TBA)
			Seminar: 1 week										TBA			Apr 2019 (TBA)
Core to Core Programme	Institutions/ departments	JSPS TYO	Max 5 yrs										TBA			Apr 2019 (TBA)
Program for Advancing Strategic International Networks to Accelerate the Circulation of Talented Researchers	Research Groups (Early career researchers)	JSPS TYO	1-3 yrs						TBA							Oct 2018 (TBA)

Application period or deadline Project starting time

*When you apply to JSPS Tokyo, please notice that the application periods and deadline above are for the head of the host institution to submit the applications to JSPS Tokyo. The time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers. Please also check each website for more details.

Programme Contact Information List

Summer Programme

British Council Tokyo: <https://www.britishcouncil.jp/en/programmes/higher-education/support-researchers>

Pre/ Postdoctoral Short Term

JSPS Tokyo : <http://www.jsps.go.jp/english/e-oubei-s/applguidelines.html>

JSPS London: <http://www.jsps.org/funding/2017/10/jsps-london-call-for-the-short-term-prepostdoctoral-fellowship-for-foreign-researchers-fy2018-first-call.html>

Postdoctoral Standard

JSPS Tokyo : <http://www.jsps.go.jp/english/e-ippan/applguidelines.html>

The Royal Society : <https://royalsociety.org/grants-schemes-awards/grants/jsps-postdoctoral/>

The British Academy: <http://www.jsps.go.jp/english/e-inv/apply18.html>

Pathway to University Positions in Japan (suspended)

JSPS Tokyo: <https://www.jsps.go.jp/english/e-teicyaku/applguidelines.html>

Invitational: Short, Long, Short S

JSPS Tokyo: <http://www.jsps.go.jp/english/e-inv/apply18.html>

BRIDGE Fellowship

JSPS London: <http://www.jsps.org/funding/bridge/>

JBUK Award

JSPS London: http://www.jsps.org/funding/jbuk_japan_award/

JSPS London Symposium/Seminar Scheme

JSPS London: http://www.jsps.org/funding/symposium_scheme/

Bilateral Programme

JSPS Tokyo: <https://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/index.html>

Core to Core Programme

JSPS Tokyo: <https://www.jsps.go.jp/english/e-c2c/index.html>

Advancing Strategic International Networks

(Program for Advancing Strategic International Networks to Accelerate the Circulation of Talented Researchers)

JSPS Tokyo: <https://www.jsps.go.jp/english/e-zunoujuncan3/index.html>

Follow us ...

For Japanese researchers in the UK/ 在英日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けいたします。対象は、英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>

JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly（学振便り）は、JSPSの公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（日本語のみ／購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<http://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)

14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom

Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669

E-mail : enquire@jsps.org | <http://www.jsps.org>



JSPSニュースレター

監修: 上野 信雄

編集長: 糸井 智香

編集担当: 松村 彩子